

# 環境デザインの課題と パブリック・アート

竹田 直樹氏（都市研究家）との議論から

## 日本のランドスケープ・デザインの現状

日本の大学で独立した造園学科を設置している大学は、建築の場合の建築学科と比べるとはるかに少ない。しかも大半が農学部設置されているために、美術・デザイン教育が軽視されがちである。特に本格的な美術教育は、ほとんど行われていない。

もともと仏教系の信仰に基づき独自の様式を発展させてきた日本の伝統的庭園は、明治維新以降の近代化にともない、その精神的背景とコンセプトを失った。しかし、造園家はいわゆる日本庭園のフォルムのみを借用あるいは模倣し、都市公園のデザインに応用した。

このため都市公園の景観は、表層的、画一的となり、つまらないという批判が一部に生じるに至る。だが、造園業界の体質は閉鎖的で、美術作家や詩人のような環境デザインに関心をもつ他分野の人が、造園設計の実務に入っていくことは、技術、人脈、情報などの観点から困難になりやすい。

このような状況のなか、1980年代後半になって、アメリカのハーバード大学でピーター・ウォーカー\*1というランドスケープ・アーキテクトに師事した一群の人々が帰国し、造園業界に一石を投じた。

ピーター・ウォーカーをはじめとするアメリカのランドスケープ・アーキテクトは、ロバート・スミッソンやウォルター・デ・マリアといったミニマルアート\*2から出発した彫刻家によるアースワークに触発され、幾何学的なデザインを都市空間に持ち込むことで、独自の環境デザインを確立した。

その背景には、造園学科の多くが芸術・デザイン学部配置され、彫刻家などの美術作家と造園家のコラボレーションが日常的に行われるアメリカの社会環境がある。



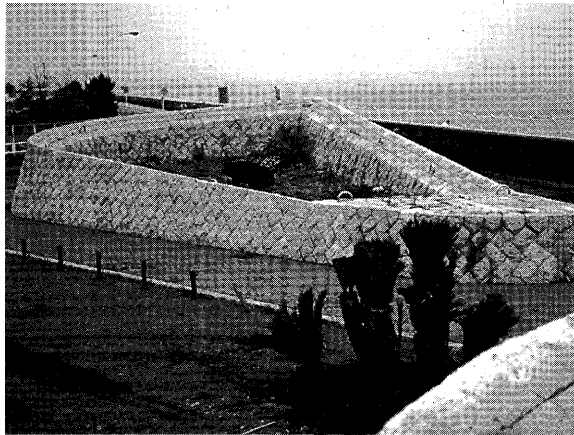
ピーター・ウォーカーによる  
駅前広場

香川県丸亀市JR丸亀駅前1991年に造られた。渦巻き型に配置された石は、強化プラスチックによる中空の擬石で、夜になると内部の照明器具により赤く光る。

しかしながら、日本においてピーター・ウォーカー流の環境デザインが根付くかどうかは甚だ疑問である。なぜなら、アメリカのような大平原に立脚する国とは異なり、日本の都市は雑然として地形も複雑なため、たとえば幾何学的な形態を導入してもあまり見栄えがしない。単にピーター・ウォーカーのデザインを模倣するだけでは、日本庭園風の環境デザインの場合と同様に行き詰まるだろう。

## パブリック・アートへの期待

1960年代から環境改善のために始まった彫刻設置事業は、1970年中頃から活性化する自治体による文化行政とともに広がりを見せ、1980年代に全国各地に波及した。現在、全国に野外彫刻は1万数千点はあると推測され、数の上ではおそらく世界一と思われる。



環境造形Q：水の広場，1984，  
名古屋市名城公園

能勢石を用いた噴水広場。平凡な都市公園を魅力あるものに変え、都市のシンボルとなった。

彫刻設置事業は、都市空間に文化的要素を取り入れたという直接的成果だけでなく、彫刻設置事業がひとつの産業となって、彫刻家を経済的職業とするという二次的成果を上げた。様々な問題を抱える分野ではあるが、この点については評価することができる。彫刻設置事業は、彫刻家に作品発表の機会と、都市空間の創造に関与するチャンスを生み出した。

3名の彫刻家により構成される環境造形Q<sup>\*3</sup>や田辺光彰<sup>\*4</sup>らのような、単に彫刻作品を設置するだけでなく、都市空間の創造自体に関与する作家の作品を見ると、環境に対する強いコンセプトを持つものであることが理解できる。日本の伝統的庭園が宗教というコンセプトを背景に独自のフォルムを形成したように、これらの作家の造形は環境への関心というコンセプトと作品のフォルムとがリンクしている。このあたりに環境デザインとパブリック・アートの接点があり、これからの日本のランドスケープ・デザインを考えるうえで無視できない重要な領域になるとと思われる。

\*1 1932年生まれ。造園家。ロレンス・ハルプリンに師事。カリフォルニア大バークレ校でランドスケープ・アーキテクチャを専攻。多数の造園作品の実績があり、日本との交流も多い。

\*2 最小限の造形手段で制作する絵画や彫刻。

\*3 山口牧生、小林陸一郎、増田正和（故）の3人の石彫家によるグループで、1968年から1988年まで活動した。作品設置場所の歴史や環境をテーマとする空間的な作品を数多く手がけた。

\*4 1939年生まれ。彫刻家。人類と環境の関係をテーマとするコンセプトの明確な作品を多様な形態で数多く実現している。野外彫刻におけるモニュメント性を否定することなく、モニュメントの美的側面を活用するところに特徴がある。

## フリートーク

造園業界にパブリック・アートの作家など新しい勢力が参入していった経過をご説明ください。

彫刻家がたまたまある場所に彫刻を設置するよう行政から依頼を受けて、単に彫刻を設置するのではなく空間全体を彫刻にしようと逆提案して実現するケースが多いようです。もっとも、こうした事例はまだまだ少なく、今後いかにして、こうした彫刻家の能力を引き出していくのかという点が課題になると思います。



田辺光彰：遥かなるもの横浜・「花壇」、1987、横浜市横浜港本牧埠頭  
巨大で重厚な石積みに囲まれた花壇。中にはイソギク、テリハノイバラ、ハマナス等かつてこの場所に自生していた植物が植栽されている。環境のかけがえのなさを表現する。

### ●竹田 直樹

1961年 京都市生まれ

1984年 千葉大学園芸学部造園学科（庭園学研究室）卒業

1991年 千葉大学大学院博士課程単位修得退学（環境計画専攻）

1992年 野外彫刻に関する論文で博士（学術）

現 在 （株）都市緑地研究所／東京事務所主任研究員 千葉大学講師

### ●主な著書

「パブリック・アート入門」（公人の友社）

「日本のパブリック・アート」（誠文堂新光社）

「彫刻家・田辺光彰 パブリック・アート21世紀」（公人の友社）

「やさしい風景学」（マルモ出版）

「CD-ROM—パブリックアートデータベース2000」（マルモ出版）

（近刊）「日本の彫刻設置事業」（公人の友社）